

78. 私の国際親善

私の Web サイトを見られて、国内のある大学研究所の外国人女性研究者 A さんから突然メールが届いた。9 月末のことだった。そこには「算額に関する研究プロジェクトを進めていて、研究の一環として日本に現存する算額のオンラインアーカイブを構築し、世界中の多くの研究者が算額に関する情報にアクセスができるようにしたい。Web サイトに優れた資料と写真のコレクションを見つけ非常に喜んだ。幾つかの画像を提供していただけないか」というものであった。私は、当該研究所の Web サイトにその研究者が紹介されているのを確認してから、「お役に立てるものがあるのなら協力したい」旨の返信をした。A さんは喜んでいた。

その後のメールのやり取りで、今度は「貴殿の研究について詳しくお伺いしたい」となったので、事前質問を頂いてから、通訳同伴という条件で 10 月末に我が家に来ていただくことになった。事前質問の内、幾つかを要約して以下に示したい。原文は丁寧な文章であった。

- ①尺八の歴史と理論の研究から和算家に興味を持ち始めたと記されていた。ヨーロッパでは音楽は長らく数学のカリキュラムの一部だったが、日本でも似たような重なりがあったか？音楽の数学的側面に関心を持った和算家はいたか？
- ②埼玉は他地域に比べ 20 世紀になっても算額が多く奉納されていた。明治維新後、直ぐに和算の活動が終わると考えていたので驚いた。埼玉の算額文化は特に強力に独立していたか？
- ③算額の言語は非常に簡潔で公式的のようだ。この言語スタイルは書物から派生したのか、それとも教室での指導から起源しているのか？
- ④非専門家が和算を詳しく理解するために最も難しい障壁は何だと思われるか？
- ⑤千葉県で非常に劣化した算額を見つけたと書いている。私も岩手で多くの劣化した算額を見た。現存の算額をより良く保護するにはどのような取り組みが必要か？

A さんは日本に来てまだ半年余りという。その語学力もさる事ながら、算額の知識を急速に身に付けていて、論理的に結構鋭い質問をされていた。私は事前質問の内容を少し分解し、その回答をペーパーに起こして準備しておいたので大体は答えられたと思ったが、理解して頂けるような内容であったかは少し心配だ。私の説明に、A さんはその用紙に熱心にメモを書きながら、何回も質問された。関連個所の資料や私の著書を幾つか差し上げたところ、大変喜んでいたのは印象的であった。

私からは、和算書の現物を見せての紹介や、今調査していることの話などを行った。

私は A さんの研究テーマについて、「10 歳若ければ色々とお手伝いをさせて頂きたかった。加齢と腰痛を抱えては一寸無理かな」と申し上げたが、“日本に現存する算額のオンラインアーカイブの構築”は説明の仕方などを考えると難しい内容を含んでいるなどと思った。でも、そこは若い優秀な人だから、必ずやうまく進めるに違いないと期待したいところである。

A さんは当該研究所の Web サイトによると、英米の有名大学や大学院で学び、学位「PhD, Intellectual History」を持ち、いくつかの研究論文もあるようだ。

その中で私の目に付いたのは、「Jesuit astronomy as a conversion tool in Japan」（直訳すれば、「日本における宣教ツールとしてのイエズス会の天文学」か）というものである。

このことについては、①カルノ・スピノラ（1564 ～ 1622）の来日、京都天主堂アカデミアでの天文数学の講義、1622 年の元和の大殉教、②フェレイラ（1580 ～ 1650、沢野忠庵）の棄教

と遠藤周作の小説『沈黙』のモデル、などの話をした上で、その論文の内容を伺おうとしたが、時間切れとなってしまった。

後日、お礼のメールが届いたが、その中には、スピノラについて調査をしていて、焦点を当てている史料（日本のイエズス会修道院で使用されたまとめ）の紹介や、その史料の日本語版（著者はペドロ・モレホン）が最近ドイツで見つかったことなどが書かれていた。その日本語版のアドレス情報も添付されていたので開いてみると、古文書を習った身ながら、なかなか読めそうにない。大分重い内容のように思えるので、今からこの分野に取り組むのは残念ながら無理のようだ。

ともあれ、私の Web サイトを見られて連絡をいただき、少し詳細な話し合いができたのは三人目だろうか。貴重な経験をしたことになる。特に今回はドイツ生まれの外国の方ということで嬉しい限りであった。Aさんと、通訳して頂いた日本女性（米国政治が専門という）Sさんに感謝申し上げます。

少しでも国際親善ができた気分になれて、嬉しい一日だった。

（2023 年 11 月 5 日）